

た。ドイツ人は怒っている時か危ない時に使うので、慣れるまでちょっと時間がかかりました。

## ドイツと日本の学校

ドイツの中学生は南河内第二中学校の見学をした時にもびっくりしました。日本の学生はドイツの学生とは違います。ドイツの学校は、汚いところもたまにあり、荒らす人も多いです。日本と違ってドイツではグループの意識は少ないし、学生たちではなく、委託の業者が学校を掃除します。「ドイツでも学生たちに学校の掃除をさせれば良い」と引率の先生は言っていました。

また、日本とドイツの教育制度が違うだけではなく、学校の細かいところも違います。床を守るためにテーブルの脚にテニスボールが付いているところなど、ドイツの中学生は写真を撮りました。

風土記の丘での勾玉づくりや、書道などの文化体験も素晴らしく、文化の違いを体験できました。ドイツ人は特に茶道の体験で感動しました。竹楓園の趣深さに盛り上がって、盆栽の写真もいっぱい撮りました。お茶をいただくときに、特に日本の心が見られます。無駄な動きはなく、全部の動作に意味があり、尊敬の気持ちがとても大事です。現在、生き



栃木SCの選手との交流

ていられる状況というのは決して当たり前ではありません。良く考えると、毎日元気に、苦しみなく生きるというのは素晴らしい人生です。それは、自分だけではなく、周りの努力の結果です。東日本大震災が起きてもドイツと日本の交流が続けられるのは、素晴らしいことです。ドイツの中学生も、自分のこれまでやこれからの将来の道について考えるようになったと思います。

## 東日本大震災を乗り越えた交流の絆

また、ドイツの訪問団が下野市に滞在している機会に、日独交流150周年を記念する菩提樹植樹が行われました。平成22年10月から、



中学生と書道体験

日本とドイツで、様々な記念行事や要人訪問を通じて、150周年に及ぶ交流の歴史を共に祝い、両国の絆を再確認して参りました。おりしも2011年3月11日に発生した東日本大震災は、筆舌に尽くしがたい悲しみと衝撃がありました。一方で、ドイツの一般市民・市民団体、企業、自治体、連邦政府、各地の独日協会など、これまで長年培われてきた両国の絆を基に、様々な被災地支援が具体的な形として現れました。東日本大震災が起こったからこそ、下野市とドイツヘルツタールの絆が強くなって、菩提樹とハシバミの植樹ができました。震災が起こったことやその被害については悲しいことですが、それとは別に、植樹ができたことはとても嬉しく思います。大切な木はグリムの森に植樹され、これから日独友好関係のシンボルになり

ます。木が大きくなるとともに、下野市とドイツヘルツタール、日本とドイツの友好関係が深くなりますように！興味がある方はぜひグリムの森に行ってみたり、下野市のホームページやとちテレWeb+を見てください。

ドイツの訪問団が帰った時に、「6日間はあるという間だなあ！」という気持ちでした。中学生訪問団の皆さんは無事に帰国したようです。成田での見送りは寂しい気持ちで、中学生の中には泣いている人もいました。日独の新しい架け橋ができました。これからの若い人達が交流のきっかけとなった石橋長英先生を初め、先人たちが築いてきた絆を続けられるように心から願っています。

交流に努力されてきた方に感謝の礼を申しあげたいと思います。おかげ様で様々な交流が無事に、楽しく実施できました。日本とドイツ・ドイツヘルツタールと下野市の絆が更に強くなって、新しい橋が作られました！

ちなみに、夏にもミュンヘンからの大学生がまた下野市でホームステイする予定ですので、ホストファミリーになるチャンスがあります。国際交流に興味はありませんか？結構面白いですよ！募集しますので、よろしくお願います！（詳しくは48ページをご覧ください）